香川大学教育学部幼児教育コースにおける
国立嘉義大学との研究交流・学生交流に関する報告

松本　博雄, 寺尾　　徹, 高木由美子, 宮崎　英一, ポール・バテン, 池田　恭哉
松嶋　佳加, 高橋　沙彩, 山地　一輝, 森山　真衣, 野田　恵子, 小川　綾花
瀧　　寧々, 松井　剛太
（教育学部）

The report regarding academic and students exchange at early childhood education course in faculty of education between National Chiayi University and Kagawa University

Hiroo Matsumoto, Toru Terao, Yumiko Takagi, Eiichi Miyazaki, Paul Batten, Yukiya Ikeda, Yoshika Matsushima, Saaya Takahashi, Kazuki Yamaji, Mai Moriyama, Keiko Noda, Ayaka Ogawa, Nene Taki, Gota Matsui
Faculty of Education, Kagawa University

Ⅰ．はじめに

本報告では、香川大学教育学部幼児教育コースの教員及び学生が訪問した国立嘉義大学との研究交流・学生交流について報告する。教育学部幼児教育コースの学生は、幼稚園教諭免許・保育士資格の取得に向け、幼児教育の専門分野（養護内容・保育者論・乳児保育・保育内容の指導法など）の科目を学習している。授業では、文献を通して理論を学ぶ以外にも、赤ちゃんモデルを使った抱き方やおむつ替えの体験や、手遊びやダンスを創作し発表し合うなど実践的な内容も含まれている。また、2年生の時から保育現場での実習が始まり、実践力を身に付ける。卒業後はほとんどの学生が、保育者の採用試験を受けて、保育現場で活躍する。

しかしながら、幼稚園教諭の免許と保育士資格の両方を取得するため、実習の開始時期が他のコースよりも早いことや授業数が多いことに伴い、実習園以外の保育の実際を知らないままに卒業を迎える学生が多い。そのような状況から、学生の中には、一部の保育観や保育方法によって、保育を価値づける傾向があることも否めない。そのため、教員は学生の時期により多様な経験を積むことによって、広い視野を持ってもらいたいと考えていたことも事実であった。

そこで、本報告では台湾の国立嘉義大学への訪問の機会を得た学生が、研究交流や学生交流を行うことによって、どのような気づきを得て、保育に対する考え方にどのような変

化があったのかを示すことを目的とする。

Ⅱ．研究交流・学生交流の実際

訪問の日程は、2016年11月26日から11月29日までの4日間であった。教育学部幼児教育コースからは、教員が2名、学部生が4名、院生が1名参加した。また人間発達環境課程から幼児教育コースの大学院に進学する予定の4年生が1名、教育学コースの院生1名も幼児教育の部会に参加し、発表を行った。

実質的な交流が行われたのは、11月27日から29日までの3日間であった。27日は、台湾の文化を知ることと台北から嘉義までの移動のために、いくつかの場所を国立嘉義大学の教員・学生とともに訪問した。28日は両大学の教員及び学生による共同ワークショップを開催し、研究交流・学生交流が行われた。29日は国立嘉義大学の附属幼児園・小学校を視察し、日程を終えた。3日間の訪問の中で、学生たちはお互いの国の文化、幼児教育の仕組みの違い、そして、学生生活について、交流を重ねた。

Ⅲ．幼児教育研究部会での交流

幼児教育の部会は、農学部や本部の立地する蘭潭キャンパスとは異なり、教育学部や附属の教員養成・研修センターのある民雄キャンパスで行われた。両大学の教員や院生による研究発表、そして本学の学生による香川大学教育学部幼児教育コースの紹介や学生生活の実際について、また嘉義大学の幼児教育コースの学生からは、台湾の文化を知る一環として、台湾のフルーツを紹介するプレゼンテーションなどが行われ、意義深い交流をすることができた。嘉義大学の幼児教育コースからは、20名を超える学生が参加して、研究交流・学生交流が行われた。

訪問した直後に、参加した7名の学生にレポートの提出を求めたところ、次のような報告があった。大きく分類すると、①語学力の必要性、②日本と台湾との文化の違いについて、③幼児教育に関する養成段階の免許取得の違いについて、の3点が挙げられる。次に各項目における学生の声を示す。

(1) 語学力の必要性

・台湾の学生の英語力に驚きました。台湾の名前の他にイングリッシュネームという名前を持っていました。どうしてそんなに英語が喋れるのかということを質問したところ、小学校のときから英語のスクールに通っていたそうです。その時に、そこの先生や、親にイングリッシュネームをつけてもらったと言っていました。台湾の学生同士でも英語を使って会話しているのを見て日本では滅多に見ない光景だと思いました。自分自身の語学力のなさを痛感しました。

・台湾に行き、台湾で発表や保育をみることで、その国の人たちの考え方の背景や日本との相違点を考えることが出来た。滞在は4日と短く、自分の英語での伝える力のなさから感じ取れなかったことや疑問点はたくさんあるが、台湾での幼児教育を少しだけでも肌で感じ、話を聞けたことは私にとって大きな意味があるのだと思う。これから先、幼児教育について考えていくなかで嘉義大学訪問を通して、感じてきたことを少しずつでもかみ砕いて日本の保育を振り返ることができればと思う。そこからまた、他の国の幼児教育についても考えてみたいと思った。

・私は今回初めて台湾に行きました。昔から英語が苦手で、どうにか英語を使わなくていいように生活していた気がします。しかし、台湾との共通言語が英語のため、台湾の学生とのコミュニケーションの手段は英語が基本と聞き、とても不安でした。二日目の観光から台湾の学生との交流が始まり、個人差はありますが、台湾の学生は皆スラスラと英語を話す姿に驚きました。台湾の学生と話したいのに、話す言葉が見つからないとき、とてももどかしく感じました。しかし、私の拙い英語でも、単語だけでも、台湾の学生はどうにか聞こう、分かろうとしてくれて、スムーズにはいかなくても、コミュニケーションをとることができました。これは、保育でも同じで、子どもが遊びたい、話したい、歩きたいなどという気持ちになれる環境が設定されているということの大切さを改めて感じました。英語の勉強をもっとしていけばよかったという反省もありますが、実際に体験することで、実践力も身についていくのではないかと思います。

・嘉義大学の学生が、とても優しくフレンドリーな性格で私たちを迎えてくれたことがとても嬉しかった。交流の中で見えてきた課題は語学力である。私たちと同じように、幼

児教育を学んでいる学生との交流であったが、母国語のように英語を話したりプレゼンテーションをしたりする彼女たちを見ていて、「日本人、このままでいいのか」と感じた。日本にいるとあまり英語の必要性を感じない。しかし、嘉義大学でのセッション中、興味深い内容であるのに、英語力が足りず、深く理解できなかったり、議論で発言できなかったりして惜しい気持ちになった。台湾の学生や先生方のように英語をコミュニケーションツールとして使いこなせると、日本だけでなく世界の人々の意見が聞け、世界の人と議論し合えるのだということを実感し、英語力の必要性を痛感した。日本にいると気付くことができない発見が海外にはあるだろう。英語を身に付けておくと自分の視野が広がるのではないかと感じた。嘉義大学の学生が何人も日本に来たいと言ってくれていることがとても嬉しい。台湾で、同じ夢を目指している仲間ができたことがこれからの私の励みになると思う。お互いに意見交換を続け、さらに交流を深めたいし、将来、それぞれの国の教育を支える人になることが楽しみである。

(2) 日本と台湾との文化の違いについて

・今回の台湾訪問では、嘉義大学の幼児教育コースの方々と交流することができ、非常に良い経験をすることができました。交流1日目には観光しながら嘉義大学の学生に街を案内してもらうことで、実際に彼女たちの生活を目にしながら知っていくことができました。特に食事や寺院について詳しく教えてもらい、日本とは異なる文化にとてもわくわくしました。2日目は幼児教育の研究発表会に参加させていただき、両国の先生方、そして院生さんの研究のお話を聞きました。台湾は移民が多く、保育者と多国籍の保護者とのやりとりの難しさや、他の言語や多文化を保育に取り入れる事の必要性についての研究を台湾の方がされており、このような課題は日本にもあるため、興味深かったです。今後これらの研究がどのように進み、どのような結論になるのか、またお聞きしたいと感じました。

・今回の大学訪問・学生交流を通して感じたことは、日本と違う点が多くありながらも、日本の大学・保育現場と似ている点も多くあったということです。国が違えば環境やシステムも違っているので似ている部分も多くあることにとても驚きました。例えば、日本の大学と同じように大学の中に実習室のような部屋があり、そこに数人の学生が集まって絵本の読み聞かせの練習をしたり、製作をしたりしている場面を見させていただくことができました。また、その部屋にあった本も日本のものもあり驚きました。

・自分たちの紹介をすればするほど相手のこともどんどん分かってきて、これもある種の大学交流の狙いなのかなと感じました。嘉義大学の学生のプレゼンテーションでは台湾の果物を紹介してくれました。用意してくれた様々な果物を食べながら、たくさんの嘉

義大学の学生とかかわることができました。その際、私は今回の訪問中一番の歓迎的な雰囲気を感じました。それまでは「お客様」のような対応をしてくれていた気がして、私自身少し緊張していたのですが、嘉義大学の学生のプレゼンテーション中は、対等な学生同士のように感じられて肩の力を抜き、自然といられることができました。

・私は今回の嘉義大学訪問を通して他の国で自分たちと同じように幼児教育について考え、学び、実践を行っている人たちがいることを実感した。どの国でも幼児教育に携わっている人たちがいることは当たり前のことである。そして、その事実もインターネットや文献、大学での話の中などで聞いたことはあり知ってはいた。しかし、どこか他人事のようにとらえ、自分とは関係のない出来事のように受け止めている部分が自分の中にあったのだと思う。今回の訪問を通して、そういった海外の幼児教育に携わる人たちと出会い、交流や幼稚園訪問をするなかで日本だけではなく、他の国でも自分たちと同じように保育をして、問題点を考えている人たちがいるということを実感することができた。住んでいる国は違っていても、自分の研究と同じように多文化によって起こる問題を取り上げている研究をしている人がいることを実感したのは自分の目で発表を見られたことが大きいと思う。文献を読むだけではわからないその人自身の思いや考えもほんの少しではあるかもしれないが、感じることが出来たように思う。国は違っていても多文化で起こる事柄を問題として捉え、考えている人がいることを実感できたことで、また自分の研究をやっていく励みや新しい興味関心の広がりとなった。

(3) 幼児教育に関する養成段階の免許取得の違いについて

・嘉義大学の学生や先生方のリアクションが新鮮でした。中でも、日本の保育士資格・幼稚園教諭免許取得の仕組みが台湾のそれとは大きく違い、とても印象的でした。日本では大学で必要な単位を取得し卒業すれば、資格や免許は取得できますが、台湾では最後の試験に合格する必要があるとのことでした。

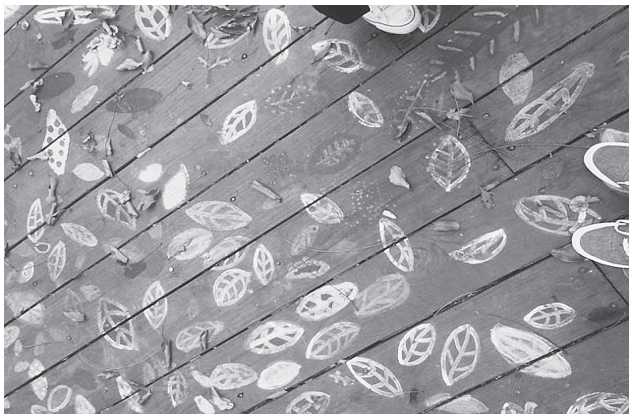
・日本の保育について発表してみて、当事者の私たちでは気づかなかったところに台湾の方々は反応していて、大学を卒業したら免許がもらえる日本と、大学を卒業したら免許をもらうための試験が受けられる台湾など、どちらが良いかは分かりませんが、自分とは違うものに目を向けることは大切なことだと思います。そうすることで、日本の保育の特徴も見えてくるのではないかと思いました。

また、自身の研究を発表した院生からは、次のような声が聞かれた。院生にとっては、こういった国際的な場における研究発表の経験が大きな意義を持つことがわかった。

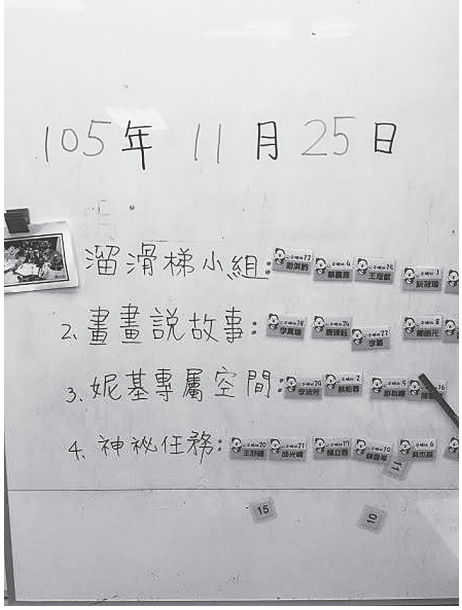
・嘉義大学では、教育学部の学生が附属幼稚園・小学校で教育実習を行ったり、大学の研究者が附属学校園の教員の方々と研究協力等を行ったりと、日本の大学とほぼ同じシステムで教員養成のためのプログラムが実践的に行われています。なかでも、幼児教育コースの学生の今回のワークショップに対する高い関心が窺えました。幼児教育部会では、「いじめ防止対策推進法の下で求められるスクールソーシャルワーカーの役割と可能性」というテーマで発表させていただきました。学校を拠点として行政機関や地域、医療機関と連携し、子どもの貧困問題やいじめ、不登校などの解決に取り組むスクールソーシャルワーカーは、政府が昨年8月に閣議決定した「子どもの貧困対策に関する大綱」で教育支援の柱の一つに位置付けられています。現在対象となっている小学校・中学校の現場では、幼稚園や保育所との連携という形で保育現場にもかかわりをもつこともありますが、その必要性は高まっており、幼稚園や保育所にも対象を拡充するよう求める声も高まっています。合同ワークショップへの参加は私にとって貴重な経験となっただけではなく、先生方をはじめ、学生や院生の方々の研究発表を見学させていただき、大きな学びの場となりました。

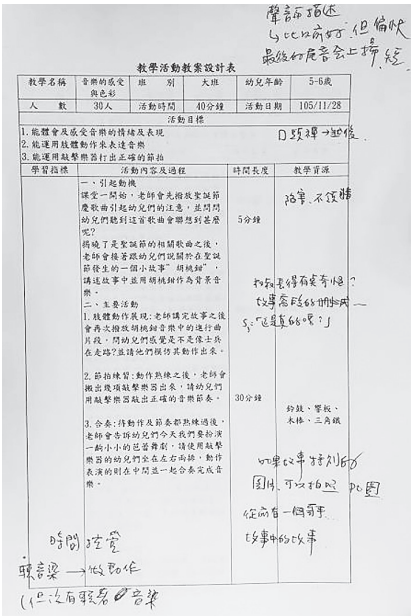
Ⅳ．附属幼児園、小学校の視察について

訪問最終日（11月29日）の午前中に、附属幼児園及び小学校を訪問する機会を得て、教員と学生一同で視察を行った。視察は1時間程度の短い時間ではあったが、園長・校長の説明とともに教室を巡回し、台湾の文化的背景や保育、教育の特徴を聞いた。また、小学生や幼児が運動場でパフォーマンスの練習をしている様子や休み時間の様子などを見ることができた。学生は幼児園や小学校の環境の違いに関心を示し、日本との違いを肌で感じられる時間となった。以下の写真は、園舎・校舎・グラウンドの環境を示したものである。



我的每一天
一年
10月
日
一
二
三
四
五
六
01
02
03
04
05
06
09
11
12
14
15
16
17
18
19
20
21
22





附属幼児園、小学校では、壁面構成や施設の環境から学んだことも多かった。学生のレポートからは下記の内容が報告された。

・嘉義大学附属幼稚園、小学校訪問では実際の保育現場を見ることができ、台湾の保育の良さや参考にしたいことを多く見つけることができました。特に子どもが遊びに使える素材が多く、それらを使った個性豊かな子どもたちの作品が印象的でした。今後自分の保育にも取り入れていきたいです。

・幼稚園参観では子どもたちが園舎で遊んでいる姿を見ることができなかったのが残念だったが、園の中を見学することができた。日本と比較して違いや共通部分などを見ることができたが、中でも良いなと思ったのは、子どもが作った工作を子どもが持って外で撮った写真が飾ってあったことだ。今まで日本で、作品をそのまま飾って名前を添えたり、作品だけ、子どもだけの写真が飾ってあったりした園は見たことがあるが、このような飾り方は見たことがない。この幼稚園のように作品と子どもを一緒に撮ることで、飾った後に「私が作った工作」と自信が持て、名前を読まなくても誰が作った工作

かわかるため子どもたちもよく見るようになったりするのではないかと考えた。そして子どもたちも自分が写っていることが嬉しいのではないかと思った。また、外の芝生の上で撮った写真であるため、のびのびとして見えるのも素敵だなと感じた。

・訪問して日本の保育室と似ている部分も多いことを知ることができた。コーナーで別々の遊びができるようになっている部分や、折り紙で何かをつくっている途中のものが置いてあるなど、日本の保育室の光景と重なる部分があった。しかし、活動ごとに部屋が分かれているところや、ピンインは幼児園の段階で習うところなど、違いがあるように感じた。この違いはこの附属幼児園のみのものなのか台湾全土で一般的なのかは分からなかったのだが、違いが面白いと思った。実際の保育の場は遠目からしかみることが出来なかったが、附属幼児園での幼児教育について保育室を通して少し感じることが出来たのは勉強になった。

・附属幼稚園に訪問した際には、小学校と併設されていることもあると思いますが、屋外の遊具が多彩であることが印象的でした。特にツリーハウスには感動しました。大人の私たちでさえワクワクし、いつもと違う世界のような雰囲気を味わうことができました。子どもにとっては、このワクワクはより一層大きく、思い出深い体験になると思います。また、訪問を通して学んだことは、日本の保育室との違いでした。保育室の壁際に「相撲ゲーム」という頭の体操用のおもちゃが2つあったり、自由作画のコーナーが本格的だったりと、子どものしたいことを尊重しつつ支える姿勢が日本とは少し違い、教育的価値を付加させているのかなと感じました。

・附属幼稚園と小学校が隣り合っていて、子どもが思わず遊びたくなりそうな遊具がたくさんあり、特にツリーハウスは印象的でした。実際に登ってみると、葉っぱがたくさん描かれていて、大人だけでなく、子どもと一緒に作っているというイメージを持ちました。秘密基地のようなとても楽しい場所でした。また、幼稚園の園舎の中も、子どもの作品がたくさん掲示されていたり、給食は給食室で自園調理されていたりと、日本のようなあたたかな雰囲気を感じました。活動の指導案も見せて頂いたのですが、形式は日本と似ていて、どこの国でも保育を行う際には、計画や事前準備が必要だと改めて思いました。

・幼稚園、小学校見学に行かせていただいて日本とは違った様々な光景を見せていただくことができました。日本と同じ10分間の休み時間でしたが、日本の小学校よりも自由な雰囲気で元気いっぱい体を動かして園庭で遊ぶ姿を見ることができました。子どもたちが、たったの10分でもめいっぱいに遊びたくなるような物的環境や人的環境が整備

されている証拠だと思いました。幼稚園では、子どもたちが実際に保育室で遊んでいるところは見ることができませんでしたが、保育室内の環境整備をしっかりと見させていただくことができました。保育室に入った時の第一印象は、“もの”が多いということです。天井からつりさげているものが多く、どこにいても何かしらの製作物が視界に入ってくるといった様子でした。日本は、壁面に装飾が多くみられますが、台湾は天井から紐をぶら下げてそこにも製作物がありました。子どもたちが作った作品が、保育室の中にたくさんあるなあと思いました。日本の保育室は室内だけに製作物を飾っているという印象がありますが、台湾は廊下(部屋の外側の窓)にも子どもたちがつくったものを飾っていました。また、日本とはちがって、色付きの粘土があって驚きました。また、台湾の方たちは皆さん優しく接してくださいました。育ってきた国は違っても、同じ夢を志している同じ世代の学生と交流することができ、新たな発見や刺激があり、とてもよい経験になりました。

・附属幼稚園と附属小学校の見学に分かれ、私は附属小学校の見学に参加させていただきました。校舎はとても広く、廊下には世界地図やアルファベットなど工夫を凝らした掲示物が並び、運動場や校庭の遊具、図書館、図工室等の教科ごとの教室や設備も大変充実していました。特に、英語教室では、触れると音が鳴ったり、自由に書き込みをしたりすることができる電子黒板が導入され、教室の四方の壁には英語で書かれたカラフルな掲示物があったり、英語の絵本を読むことができるスペースもあったりと、まるで英会話教室のように子どもたちが楽しみながら英語を学習できるような工夫が随所に見られました。日本では、平成23年度より、小学校において新学習指導要領が全面実施され、第5・第6学年で年間35単位時間の「外国語活動」が必修化されていますが、英語教室や電子黒板の導入といった設備はまだまだ充実しているとは言えないのが現状です。国際教育に特化した英語カリキュラムが行われている附属小学校からは、多くの学びを得ることができました。台湾は、OECDの最新の学習到達度調査（PISA 2015）では科学的リテラシーにおいて全参加国・地域中4位、数学的リテラシーでは5位の日本を上回る4位であり、IEAの最新の国際数学・理科教育動向調査（TIMSS 2015）でも小学校・中学校ともに3位と日本を上回っています。そのような点からも、附属小学校の見学をさせていただけたことはとても貴重な経験となりました。

Ⅴ．おわりに

今回の訪問は学生たちの刺激となり、保育に関することはもちろんのこと、両国の文化背景を含めた学生生活の違いや語学に関する意識の違いなどを感じることができたようであった。日本でも、多様な家庭背景をもつ子どもたちを含む保育のあり方が検討されて久

しい（ト田、2015）。しかし、現実的には外国籍の子どもが保育所や幼稚園にいるケースには地域差が大きく、養成段階でも熱心に取り組まれているとは言い難い現状にある。
今回のように他国の文化や保育に触れる経験が、学生の養成に資するようにしていくためには、教員にも国外の保育事情を理解するなど、国際感覚を身に付ける必要があるだろう。そのためには、今回の訪問をすべての学生に広げるとともに、授業のあり方等も再考する必要があると思われる。

今回は残念ながら幼児園のほうでは実際の保育活動を見学することはできなかった。お互いに保育の実際を視察したうえで議論を行うことによってさらなる深まりが期待できるだろう。これは今後の研究交流・学生交流の持ち方の課題ともいえるかもしれない。

引用・参考文献

・ト田真一郎・平野知見・臼井智美・戸田有一（2015）多文化状況の相違による多文化共生保育実践の多様性のM-GTAによる検討. 乳幼児教育学研究、(24)、21-37.

謝　辞

今回の訪問にあたり、国立嘉義大学の教員や学生の皆様が快く受け入れてくださったことに感謝申し上げます。また学生も含めた訪問を企画してくださった香川大学インターナショナルオフィスの先生方にも心より御礼申し上げます。最後に、今回の訪問にあたって、一部の教員及び学生が教育学部国際交流委員会とインターナショナルオフィスから資金の援助を受けました。ここに記して深謝申し上げます。